

カンギレムによるエピステモロジーとしてのバシュラール読解

池田信虎(大阪大学)

本発表はガストン・バシュラールとジョルジュ・カンギレムについて、両者の共通項として自明視されているエピステモロジー(épistémologie)という区分そのものを再考するものである。

近年、二十世紀フランスの科学哲学者であるバシュラールとカンギレムに関する個別の研究は国内外において隆盛を誇っている。例えば、2023年に刊行された日仏哲学会の論文誌『フランス哲学・思想研究』第28号ではカンギレムに関する複数の論文が掲載され、国外に目を向ければバシュラールを扱う国際ジャーナル、*Bachelard Studies* が2020年に発刊されて以降、今日に至るまで数多くのバシュラール研究が掲載されている。また、両者はフランスにおける独自の科学哲学であるエピステモロジーの研究者としても知られており、双方の個別研究が進む事はエピステモロジーという学問領域の発展にも繋がっていくものと思われる。

しかし、バシュラールとカンギレムがエピステモロジーの研究者、すなわちエピステモローク(epistémologue)という共通の名で呼ばれる際、果たして、そこでは何が同じであると言われているのだろうか。

確かに二人はソルボンヌ大学文学部における科学史および科学哲学の教授を歴任しており、カンギレムはバシュラールを「フランスで初のエピステモローク¹」と呼んでいる事からも、両者を同じエピステモロジーという領域に携わった研究者として考える事は自明であるようにも思われる。

他方で、そもそもエピステモロジーという領域自体が個別の科学史を具体的に分析するという特性上²、共通の手法や見解が判然としないのも、また事実である。本発表で扱うバシュラールとカンギレムを例に取っても、前者は数学、物理学、化学を扱っており、後者は医学、生物学、生理学を分析しており、端的に彼らの研究を併記する事で何らかの共通項を見出す事は難しい。

勿論、両者のエピステモロークとしての共通項を分析した研究も存在する。上野はバシュラールの認識論的障碍(obstacle épistémologique)という人間が何かを認識する際に必ず経験される最初の誤謬(erreur)と、カンギレムにおける生命が持つ正常性の範囲としての規範性(normativité)を示す契機としての規範外の奇形(monstruosité)、すなわち生命体にとって何らかの異常な形態という二つの要素が、バシュラールとカンギレムの両者にとって共に、認識を可能とする最初の誤りとして評価されている事を指摘する³。また、Gattinara は両者の差異と共通点を次のように論じている⁴。カンギレムはイデオロギーについて、科学の成立段階から関わるものとして規定しており、バシュラールには無かった観点を持っていた一方で、両者は共に科学史をただ自身の哲学の為に

道具的な使用を行ったのではなく、エピステモロジー、すなわち認識論と歴史を相互作用させる事で、概念、カテゴリー、誤謬、真理の変化を分析していた。

しかしながら、エピステモロジーという科学ではない領域を重要視したのは、明らかにカンギレムである。実際、バシュラールは『新しい科学的精神』において、「科学的思考こそが哲学論争の基本的な主題になるだろう」と主張し、「この科学的思考が直観的で無媒介的な形而上学を、論証的で客観的に修正された形而上学として置き換えるであろう⁵」事を支持している。つまり、カンギレムとバシュラールをエピステモロジーという同じ学問領域上で論じようとする試みは、バシュラールの研究が個別の科学史を扱っており、一般的にエピステモロジーと呼び得るものであったとしても、カンギレムによる読解の影響は避けられないものとしてあると思われる。

そこで、本発表ではカンギレムとバシュラール、両者を示すエピステモロジーという区分そのものについて、カンギレムによるバシュラールの読解において登場したものとして分析を行う。

まず、カンギレムの『科学史・科学哲学研究』におけるバシュラールの読解を元に、カンギレムがバシュラールのどのような分析をエピステモロジーと呼んでいたのかを確認する。

次に、カンギレムによって参照された『新しい科学的精神』などのバシュラールによる記述⁶に基づき、科学に内在するような仕方では考えられていたバシュラールの科学哲学を明らかにする事で、カンギレムがバシュラールに対し、どのような読解を行ったのかについて確認する。

最後に、カンギレムによるバシュラール解釈から、我々がエピステモロジーと呼び得るものの条件について分析を行いたい。

本発表の目的はバシュラールがエピステモロークである事を否定するものではないし、また、カンギレムがエピステモロジーという概念の起源である事を論証するようなものでもない。本発表は、カンギレムがバシュラールをエピステモロークとして解釈した理路を明らかにする事で、エピステモロジーの概念規定とその成立条件、そしてエピステモロジーの拡張可能性を検討するものである。

¹ Canguilhem, Georges, *Études d'histoire et de philosophie des sciences*[1968], Paris, Vrin, 1994. (ジョルジュ・カンギレム、『科学史・科学哲学研究』、金森修監訳、法政大学出版局、1991年。)

² エピステモロジーの概念規定については、金森修、「エピステモロジー」、『哲学の歴史 11』、飯田隆責任編集、中央公論新社、2007年、536頁を参照。

³ 上野隆弘、「奇形の哲学——バシュラールとカンギレムにおける「誤謬」概念」、『フランス哲学・思想研究』、第24号、2019年、96-106頁。

⁴ Gattinara, Enrico, C, "The Relationship between History and Epistemology in Georges Canguilhem and Gaston Bachelard" *Transversa I: International Journal for the Historiography of Science*, 4, 2018, pp. 13-25.

⁵ Bachelard, Gaston, *Le nouvel esprit scientifique*[1934], Paris, PUF, 1999, p. 6. (ガストン・バシュラール、『新しい科学的精神』、関根克彦訳、筑摩書房、2002年、9頁。)

⁶ Bachelard, Gaston, *La philosophie du non*[1940], Paris, PUF, 2012. (ガストン・バシュラール、『否定の哲学』、中村雄二郎・遠山博雄訳、白水社、1998年。)

⁷ Bachelard, Gaston, *La valeur inductive de la relativité*, Paris, Vrin, 1929.